慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	レンネル島文化史の調査計画について
Sub Title	A research design for Rennell island culture history
Author	近森, 正(Chikamori, Masashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1974
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.46, No.2 (1974. 12) ,p.79(195)- 93(209)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19741200-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

レンネル島文化史の調査計画について

近森　正

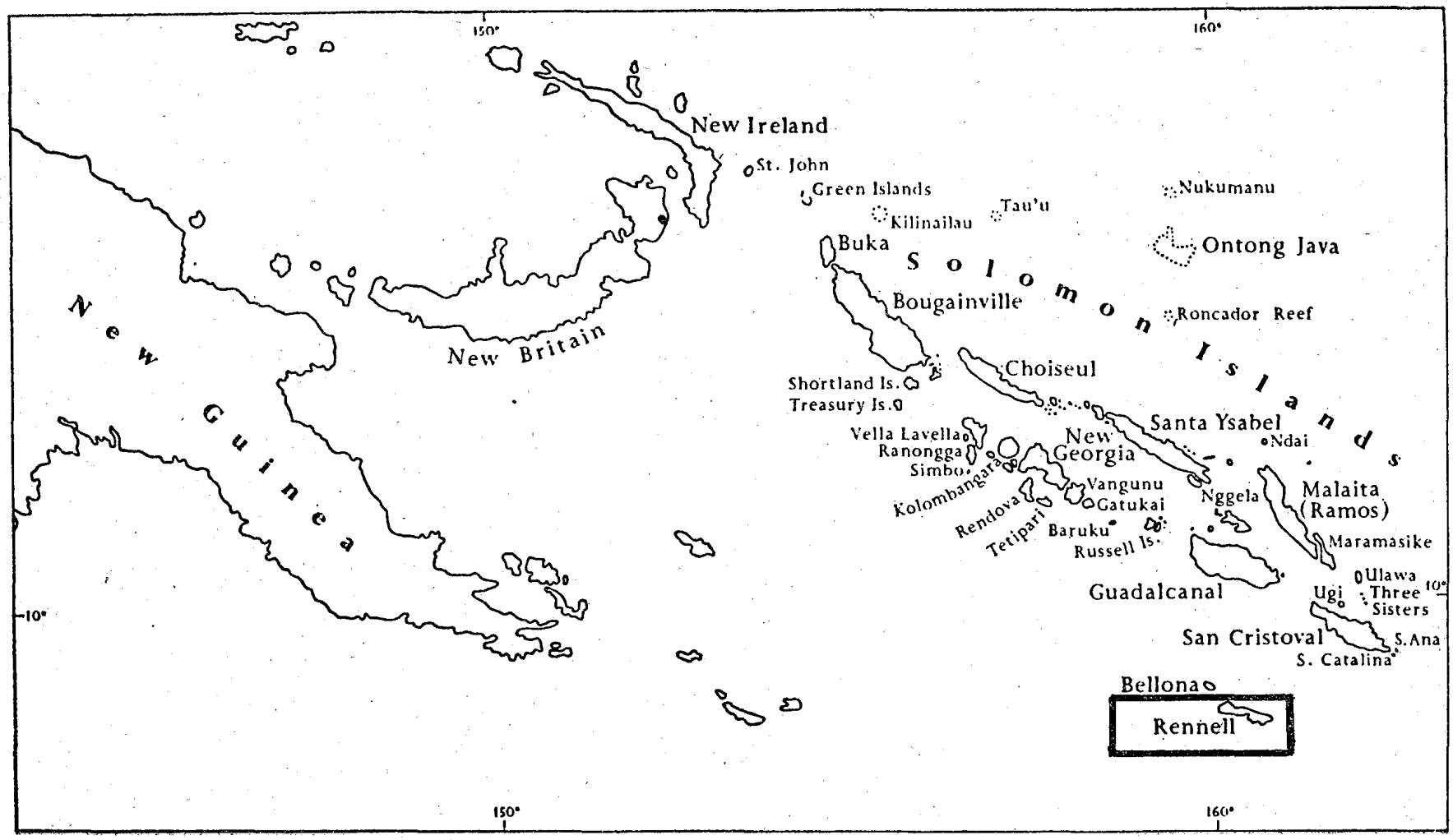
一

いわゆるポリネシアの「三角形」[1]の文化圏をこえてメラネシアのソロモン諸島の南及び東側の限界、およびニュー・アイルランド島の東側にはポリネシア系の住民によって占居される島々が点在している。彼らの言語は基本的にポリネシア語に属し、一般にポリネシア・アウトライアーと呼ばれている。

今回、慶応義塾大学考古学・民族学研究室が一九七三年度文部省海外調査助成金にもとづき調査対象に選んだレンネル島は、全島約一、〇二〇人[2]の、そうしたポリネシア・アウトライアーが居住する。一九六四年同じく我々がおこなったヴェララヴェラ島を中心とするソロモン諸島西北部の調査では[3]、西に連らなるパプア文化との関係が問題になったが、今回の調査では同じソロモン諸島の中で東側のポリネシア文化との関係に焦点があてられ、あわせてソロモン諸島の文化史の再構成に新たな解明の糸口を与えることを期するものである。

二

レンネル島は、英領ソロモン諸島の南限、南緯一一度三四分と一一度四七分、東径一五九度五五分と一六〇度三七分の間、ガダルカナル島の南一八〇キロメートルに位置する。島の規模は西北西―東南東方向に七九・八キロメートル、巾一三・七五キロメートル、海面上の高さ一一〇メートル。典型的な隆起珊瑚礁である。島の東半分は面積一三〇平方キロメートルの半淡水湖テ・ンガノ湖が占め、西半分は外周を一〇〇メートル以上の断崖によって囲まれた盆



第1図　レンネル島周辺地図

地形の内陸部をもつ。(第一図)住民についての記録は一九〇六年に C. M. Woodford が文明の影響があらわれる以前の重要な情報を残しているのをはじめ、[4] 一八五六年にレンネル島をおとずれた Bishop Patteson によって蒐集された資料にもとづいて S. H. Ray が言語学的な所見を発表している。[5] 一九〇八年から一九一一年の間にいくたびか同島に上陸した N. Deck は原住民の生活について情報をもたらしている。[6] ついで一九二七年には H. Ian Hogbin と G. A. U. Stanley が調査をおこない、Hogbin が伝統的な文化について短い記録を残すとともに、[7] Stanley は地質学的な報文の中に民族学的な観察を載せている。[8] 一九二八年と一九三三年に The Whitney and Templeton Crocker 探険隊の一人としてレンネルと隣接のベロナ島に入った S. M. Lambert は、これら二つの島の住民生活を観察した。[9] また同探険隊のメンバーであった McGregor は宗教に関する貴重な論文をまとめ、その中で彼は神々の体系をとりあつかうとともにレンネル島のテ・ンガノ地区で観察した収穫儀礼を、貴重な写真とともに報告している。[10] さらにティコピア島において大きな成果をあげた R. Firth はレンネル島へ到来した二人のティコピア島民について記録している。[11] その後、第二次大戦後になって Birket-Smith が一九五一年にレンネル島を調査し、急速に崩壊しつゝある伝統的な文化について精力的に資料をあつめ、主として物質文化の記録に力を注いだ報告が出された。その中で彼はレンネルとベロナ島民の起源について興味ある議論を展開している。[12] 一九五三年には英国の動物学者 Bradley 夫妻がレンネルとベロナ島に入り、Bradley 夫人はレンネルで採集した神話と歌を収録している。[13] また同夫人は一九五一年のデンマークのエクスペディションと一九五三年の大英博物館の自然科学的調査の成果をまとめた報告書の中でもレンネルにおける鳥類の記述をおこなっている。[14] 数年間英領ソロモンの地方長官であった R. G. Roberts はレンネルとベロナの伝承をあつめ、これら二つの島におけるポリネシア人の最初の移住についてとりまとめている。[15] その後一九五七年の十月から翌五八年の四月にかけてレンネルに入ったハワイ大学の S. H. Elbert は言語学的な調査を

おこない[16]、あわせてキリスト教化以前の宗教と文化、伝承に関するかなりの資料をあつめている。つづいてこれに遅れること六ケ月ほどしてデンマーク国研究基金によって、T. Monberg がレンネルにおいて伝統的な宗教に関する調査をはじめたが、まもなくポリオの流行によってインフォーマントに支障を生じ、四ケ月間の調査のうち後半はベロナ島に移っている[17]。その後 Elbert と Monberg はレンネルとベロナ島の伝承研究を共同でまとめあげている[18]。

以上、レンネル島に関する研究は少なくはないが、それらは主として伝承、宗教、言語に限られ、考古学的な調査にもとづく研究はまだなされていない。デンマークの考古学者 J.I. Poulsen は一九六八年に単身でレンネルを訪ずれたが、実質的な成果をあげることがなく、隣接のベロナ島にその調査地を移したと聞いている。

三

従来、ポリネシア・アウトライアーの言語の形成をめぐって、二つの対立的な見解がみられた。すなわち、ひとつは古く Churchill らによって唱えられた立場で、アウトライアーのポリネシア語とメラネシア諸語におけるポリネシア的語彙要素をもって、それらが先史時代にメラネシアを通って、西部及び中部太平洋に拡がったポリネシア人の移動の残跡であるとする。最近では A. Capell がこの見解に応じてアウトライアーの言語を、メラネシアを通って東漸したポリネシア語の古い型（archaic form）であるとしている[19]。

しかし他方、今日多くの研究者はアウトライアーの起源を、ポリネシア人の西方への二次的な移動に求めている[20]。それらの考え方は、エリス諸島からトンガ諸島にかけて、いわゆるポリネシアの「三角形」の西側地域に、ポリネシアの副文化領域の成立をみとめることに共通点がある。A. Pawley は東から西へ移動したアウトライアーの出発地が、エリス、フトゥナ、トンガなどの島々に求められるとし、エリスとフトゥナ語の歴史的発達過程の中で、アウトライアー諸語を考察している。ポリネシアの「三角形」の西側が破られる以前に、アウトライアー諸語の言語学的

要素に、セットとしてのまとまりがみとめられないならば、たしかにアウトライアーをメラネシアを通過して東漸したポリネシア人の残跡とみることは困難になるだろう。

レンネル島民の言語は、現在、詳細には知り得ないが、西部ポリネシアと関連があるといわれ、ティコピアが密接な結接点になることが予想される。Levison らの潮流、風向などにもとづくコンピューター・シュミレーションの結果では、レンネルとウォーリス（ウベア）、サモア、トンガとの間の接触のプロバビリティーはなく、エリスとの間にわずかに期待がもてるという。[22]

さてレンネル島の伝承は、現在の島民があきらかに東方のポリネシア文化圏内から移住してきたことをつたえている。今から二四世代ほど以前に、八人の首長にひきいられた約百人の人々が母なる島ウベアから、新たな土地を求めて旅立った。カヌーは西に航海し、フトゥナ島をへてヘヌアタイ島についた。そして、その島をはなれた時、首長のカイトゥをのせたカヌーと、彼のおじにあたるトゴのカヌー、それにタウポンギと呼ぶ男のカヌーをのこして、他のすべてのカヌーが沈んでしまった。その時、海に落ちた人々の中からトゴは八人の首長の後裔にあたるそれぞれ八組の夫婦をひきあげることができた。そして彼らのカヌーはさらに西に向い、ムガバ（レンネル島）のラヴェナ湾に到達し、カイトゥはウベアからもってきた黒い石を三つ陸にあげた。しかし彼らはすぐには、この島に上陸せずに隣りのムギキ（ベロナ島）に至ってはじめてカヌーをおり、そこを彼らの最初の居住地にきめた。カイトウとタウポンギたちが島に上ったとき、レンネルとベロナ島にはヒティと呼ぶ小さな黒い先住民がいたが、後になって彼らに征服されてしまったという。以上が島民の移住伝説の大略である。これらの内容がどこまで歴史的に真実を反映しているかには疑問があり、むろん歴史的資料としての妥当性を欠くと思われる。しかし、そのなかから、レンネルとベロナの島民が東から到来したこと、ポリネシア起源であることは多少ともうかゞえるのである。たゞ故地とされるウベアでの伝承を全く欠いていることと、ウベアからきたカイトゥより以前にその系譜がさかのぼらないことは何を意味す

るのだろうか。また先住民とされるヒティについても、伝承は多くを語らない。伝承によるかぎり、それはポリネシア系住民とは違った黒い皮膚をもつメラネシア人を思わせる。S. Elbert はレンネル語における gh と l の音素に、ポリネシア語にはあらわれないメラネシア的な、いわゆるヒティの遺産をみとめようとしている。[23] 先住民の存在については考古学的調査の結果を期する以外に決定的な手だてがないように思われる。

さて、この移住伝承には、また島民の「歴史」が含まれている。さきにあげた八組の夫婦はベロナ各地に居住し、それぞれ子孫を残して八つのリネージを形成した。しかし、それから九世代ほど後になるとサァ・カイトゥとサァ・タウポンギの二つのリネージだけが残り、他は戦争を通じて根絶した。サァ・カイトゥはサァ・タウポンギより大きく、時をへてベロナ東部の創始住地からいくつもの小さな単位に分岐してひろがった。六世代のちに三人の兄弟がレンネル島にわたり、ルグとムギヘヌアとカナバのそれぞれ三ケ所に居住地をさだめた。そして、彼らの子孫は三つの地区にそれぞれ同一の祖先にあとづけられる集団、カカイアンガを形成した。カカイアンガは時をへて、いくつもに分岐し、また統合されたが、キリスト教が導入された一九三八年の時点で七つのカカイアンガがあったといわれる。こゝで、いわゆる村に相当する社会単位がみられなかったという点は注目すべきである。ハカフアと呼ぶカカイアンガの首長は、共通の祖先をもつ子孫のうちの、最も直系に近い男性の中から決定され、宗教や戦争に際して決定権をもつとともに、最も重要な儀礼を演じていた。通常ハカフアは、そのカカイアンガの地域における最初の定住地を意味するハカノホンガに住む。したがってその場所は他のすべての集落が、そこからひろがったところと考えられている。

小家族の単位すなわち夫婦とその子供達はそれぞれ耕作地に近いブッシュを切り開いて居住地（マナハ）をさだめる。多くの場合、一つの家族単位は内陸部と、漁季に用いる海岸に、二つ、あるいはそれ以上の居住地をもっている。今日、レンネル島全域にわたってマナハの分布は、き

わめて特徴的である。すなわち農耕に適したテラロッサ型アルミナ質の赤色の土壌が、内陸部の硬堅、緻密な石灰岩にかこまれた凹地に、ポケット状に形成されているために、農地をともなう集落が大きなものに発達せず、居住地が適農地をもとめて島内各地に分散していることである。マナハはそれぞれ独立して、最も小さい社会機能をはたすが、同時に同じカカイアンガの中のマナハは、宗教儀礼や戦争などの際にはとくに相互に強い結びつきをもっていた。

出自は父系であって、第一子が第一位にランクされる。しかし母方の系譜への結びつきもかなり強い。結婚は交叉イトコ婚が一般的で、カカイアンガ相互の族外婚は理想的なものと考えられている。ところで、宗教的社会組織の重要な特色は、すべての男性がガグエンガに属していたことである。ガグエンガは一種の祠で、直方形あるいは櫂の形に地面をほりくぼめた上に、簡単な家屋をもち、その中に聖なる杖やマットがおかれる。祠の前には、わずかの空間があって、低い土塁がめぐっている。それは、かって祖先であるカイトゥが島に到達した時にテウセあるいはマガマウベアと称するガグエンガをもたらしたのにはじまるという。当初すべての島民は、そのガグエンガを認めていたが、カカイアンガが拡散するにつれて、それぞれのカカイアンガが新しいガグエンガをもつようになり、さらにまた多くの祠をつくるようになったといわれる。この祠は儀礼に際して重要な役割をはたすが、それは二柱の最高神のうちのテハインガ・アトゥアの祭儀に関連しており、他方の最高神テフアイガベンガの祭儀は人家の中でおこなわれる。通常、ガグエンガの司祭者あるいは神官として首長ハカフアがあたり、彼の弟または息子が第二司祭者としてこれを助けることがある。

数多い祭の中で最も重要なものは五月から八月にかけておこなわれたガプと呼ぶヤムイモの収穫祭である。祭はそれぞれの集落マナハでおこなわれる。マナハのヤムイモが収穫されると集落の長は他のマナハから親類を呼びあつめる。この祭礼の目的はマナハとカカイアンガにおける生活、健康、豊作を確保するためのものである。重要なこと

は集落の長の妻の兄弟にあたるマアアがこの儀式を進行させることである。これはオントン・ジャワで一時的に土地が女性に所有されるように、ポリネシア・アウトライアーの間で、母方の系譜原理が部分的に社会的経済的機能をもつ一つの例であるかもしれない。むろんこうした祭儀は現在、全くおこなわれることがなく、その形骸が断片的に知られるにすぎない。今日では、人々の幸福はすべてイエス・キリストのもたらすところとなっている。実際この三十年の間に伝統的な文化は、きわめて急速に消失したと思われる。

さて、キリスト教侵透の過程は、ほゞ次のようである。

一九一〇年に the South Seas Evangelista Mission が三人の宣教師をレンネル島に上陸させたが、三人とも殺されてしまった。それ以来布教活動は中止されていたが、再び宣教師の活動がはじまるのは、一九三四年頃になってからである。そして一九三八年までには the South Seas Evangelista Mission をはじめ the Seventh Day Adventists Mission, The Melanesian Mission などが布教を始めていた。レンネルにおけるキリスト教の導入はきわめて象徴的なものがあったようである。一九三八年テ・ンガノ湖の東端に近いニウパニの部落でおこなわれた収穫祭では、伝統的な神々とキリスト教との間に対立が生じ、発狂した伝統宗教の司祭主が人々に殺されるという事態が起った。その後、次第に社会構造も教会を中心とするものに変化していった。一九三八年を劃して人々は「新らしい世界」に入ったといわれるのである。一九三八年十月、ニウパニでおこなわれた劇的な収穫祭については、S. Elbert と T. Monberg が、それぞれ別のインフォーマントから、その経過をよく聴取している。(24)

キリスト教との接触が、伝統的文化を破壊する最初の島民の社会的文化的変化を起したとするならば、次いで現われた大きな変化は、やはり第二次大戦中における日米軍のガダルカナル戦の影響であろう。レンネル島はきわめて短期間にあったが米海軍の待避基地になったことがある。その間の事情が、大戦後、澎湃としておこったソロモン諸島の土着運動マーチング・ルールとどのような関係があるか

は、今後の調査の課題である。また最近はじまった日本の企業によるボーキサイト資源の探査は、島民の経済生活に大きな変化をもたらさずにはおかないだろう。

これらの幾たびかにわたる文明との直接、間接の接触が島民の新らしい歴史をつくりつゝあることは云うをまたない。

四

島の最近の急激な文化変容の中で、伝統的な文化の研究は、もはや歴史的方法よってしかなされないであろうと予想される。したがって文字をもたなかったレンネル島の住民の歴史は、一歩一九三八年をさかのぼった時点から、古老の記憶と伝承、それに考古学的手法によってのみ再構成しうるであろう。

そこで、今回の調査において、主要な一分野をしめる考古学的なフィールド・ワークの可能性は、次のような諸点に要約されるだろう。

(1)伝承に全くあらわれない、いわば先史学的な範疇に属する遺跡と遺物の調査。

(2)伝承にみられる先住民ヒティの遺跡と遺物についての調査。

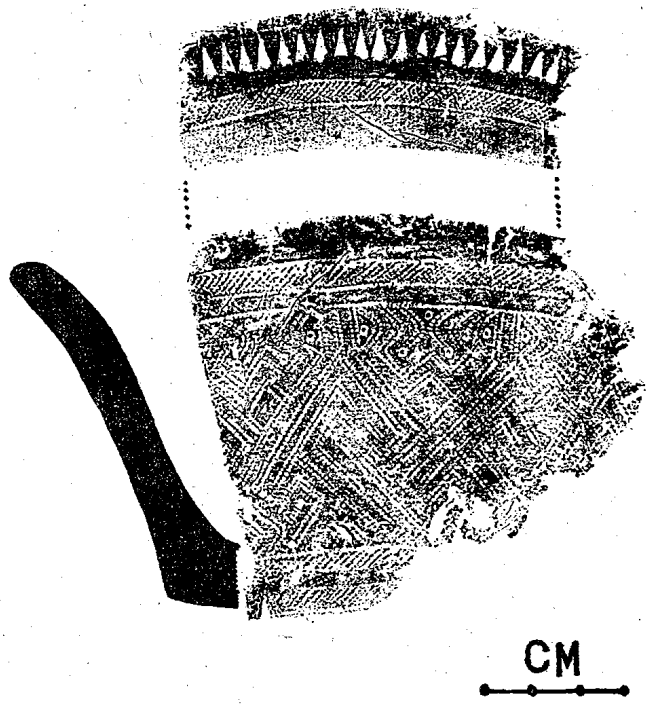
(3)伝承にあらわれる島民の、すでに消滅したトライブないしクランに属する遺跡と遺物の調査。

(4)キリスト教導入を年代的下限とする現島民の、直系のトライブないしクランに属する遺跡と遺物の調査。

いま、われわれは(1)をレンネル島における先史考古学(プレ・ヒストリー)的調査とし、(2)を原史考古学(プロト・ヒストリー)的調査、(3)と(4)を歴史考古学(ヒストリカル)的調査と呼んで、作業計画を立案中である。

(1)先史学的な研究の対象は、ひとりレンネル島の地方的な問題にとゞまらない。東部メラネシアにおける最も初期の文化相は、ニュー・カレドニアの西岸で発見されたラピタ遺跡出土の遺物を標式とするラピタ式土器によって、近年ようやく知られるようになった。この土器は多くの場合、平底ないし浅鉢形で、器面に貝の腹縁をもちいた、きわめて精巧な幾何学的な歯形文様をもち、かんらん石や輝石などを含むテンパー材で、赤褐色の入念なスリップ仕上

げをしている。ラピタ式土器は、すでに一九〇九年、ニュー・ブリテン島に附属する小島ワトムで発見されていたが、その重要性については一九六〇年代にいたるまで認識されなかった。その分布は現在、東メラネシアから、ソロモン諸島南東部をとおってポリネシアのトンガに至る地域。ニュー・ブリテン島のタラセア、ワトム島。ニュー・アイルランド島に附属する小島アンビトル。ニューギニアの南岸に近いユール島。ソロモン諸島のベロナ島。リーフ諸島のガワとロムロム島。サンタ・クルーズ諸島のテ・モトウ・ノイ。ニュー・ヘブリデス諸島のエファテ島。ニュー・カレドニア島のラピタ、パイン島（イル・ド・パン）。フィージー諸島ヴィティ・レヴのナトゥヌク、ヤヌカ、シガトカ。サモア諸島。トンガ諸島のヴァヴァウ、ハアパイ、トンガタプなどで知られている。この分布にみられる特徴は、メラネシアでは比較的大きな島に附属した小島に発見され、ポリネシアでは、西側のサモアとトンガにのみ見出されている。ラピタ式土器によって指標とされるラピタ土器文化は、一つの文化伝統ないし複合体として考えるべきもので、その年代にもかなりの巾があり、それにともなう遺物にも多様性がみられる。今日、公表されているラジオカーボン測定の結果では、BC一二九〇年からBC七〇年の間の年代を示めしている。[25]（第二図）



第2図　リーフ諸島ロムロム島ラピタ式土器

ラピタ式土器それ自身、時として西南太平洋の遠距離を交易されたことがあったと推されるが、それとともに石器の原材である黒耀石が二〇〇〇キロメートルの遠距離を越

えて運ばれた事実が知られている。オーストラリア国立大学のW.R. Ambroseらは、ラピタ式土器にともなった黒耀石の成分分析にもとづき、ニュー・アイルランドのアンビトルと、はるか東のリーフ諸島のガワ出土の黒耀石のフレークが、ともにニュー・ブリテン島のタラセアを原産地とし、BC一〇〇五―八二五年（ラジオカーボン測定）ごろ交易されていることを立証した。[26] このように、きわめて広い移動を示めすラピタ式土器文化は、西南太平洋に侵透したオーストロネシア語の最初の拡散に関連があるとみられ、W.G. Solheimは土器文様のモチーフの分析を通じてフィリピン、インドシナ半島におけるサユーイン・カラナイ土器複合との関係を指摘している。[27] また一方、トンガにみられるラピタ土器文化は、今日ポリネシアにおける最も初期の文化相とみなされており、これがBC三〇〇年ごろ、あるいはそれよりいくらか早くサモアに入って無文土器をつくりだし、やがて土器の製作を中止する。これによって土器をもたないポリネシアの文化は、トンガからサモアをへて東ポリネシアへ広がる、いわば連続的孤立化の過程で形成されたと考えられている。

レンネル島に隣接するベロナ島では、一九六八年にJ.I. Poulsenが調査したマタヘヌア部落のBe五三遺跡からラピタ式土器が発見されている。[28] 遺跡は島の最西端、島をとり囲む崖が幾分開いて海に近づきやすい平坦地を形成した低い小丘の上にある。出土した土器は、口径二三センチメートル、高さ六～八センチメートルの浅鉢形で、無文ではあるが、器面調整および色調などの点からみて、典型的なラピタ式土器に対比できるものであり、ラジオカーボンによる測定年代はBC一二〇年±八〇をしめしている。報告者は、それをトンガ第四型式に比定し、西ポリネシアとの結びつきを強調している。ベロナとレンネル島は、ラピタ土器文化のひろがりにおいて、メラネシアと西部ポリネシアをつなぐ重要な地理的位置を占めていると考えられるのである。今回のわれわれの調査では、レンネル島のいくつかの湾に面した平坦地、海岸台地上に、この種の遺跡を発見する可能性があると思う。

(2) 伝承にみられるヒティの考古学的証拠について、非常に

豊かな伝説伝承をもつこの島の歴史研究にとって、これらの伝承が史料としていかほどの有効性をもちうるか。文字を持たない民族の歴史研究上の方法論的課題としても興味深い。すでにふれたように、島民が最初にウベアから移住してきたときレンネルとベロナには、すでに先住民としてヒティが居住していたことを伝承はつたえている。最初の移住者カイトゥは、ヒティが魔呪を行使するために彼らを征服したというが、各種の伝説にうかゞわれる両者の関係は、むしろ友好的なものがあり、ヒティは新来の移住者たちに彼らのもっていた農耕や漁撈の技術を伝えている。ヒティの性格は、ある意味において、ポリネシア文化にひろくみられる神話的住民メネフネに共通したところがあり、この島の居住史上における位置は明確でない。民族誌的あるいは言語学的観点からすればヒティをメラネシア的な民族としてとらえる可能性があるが、その時間的深度は全く明らかにし得ない。ところで、ヒティの伝説をもつ遺跡には、ベロナ島ではマウンド状の遺構が知られているが、レンネル島ではブッシュの中の洞穴、ないし岩蔭の居住址が多く、八月の予備調査の際には、島の北西部にあるそれらの一つを踏査した。その他には湧水地にある井戸状の洞穴、海浜の巨石、立石などがあり、それらの分布、立地の記録、および発掘は、今回の考古学的調査計画の一部をなす。

(3)と(4)の考古学的調査は、現島民の過去と直接に関係をもつ。一九三八年のキリスト教導入によって破壊されたのは島民の宗教体系だけではなかった。集落の形態、住居の配列にも大きな変化があったと推測される。今日、教会を中心に円環をなして、住居とそれに附属する炊舎を配列するマナハのパターンは、キリスト教化以後になって定形化したものとみられる。一九六四年にわれわれがおこなった西部ソロモン諸島における集落遺跡の調査では、キリスト教及び西欧文明との接触によって、集落の立地に大きな変化がおこり、母系親族組織の弛緩によって集落形態が根本的に変形した経緯を追跡した。レンネル島に関するキリスト教化以前の断片的報告によれば、祖先の墓地は家屋に近い通路に沿って、前面に男の、後方に女性の墓地があっ

た。祠であるガグエンガは、今日その機能を失なって、すでに遺構として古い集落地の一隅に見出される。過去の集落の復原と宗教的遺構の調査は、伝統的な文化の諸要素を、その場に捉してとらえる上に欠くことができない。考古学的手法は、また比較的新らしい過去のエスノ・ヒストリーの再構成にとって、きわめて有効である。

五

さて、創造神マウティキティキの釣針によって、海中からつりあげられたという伝説にはじまる、この島の「歴史」は豊かに彩られている。いま、われわれに課せられた文化史的研究にとって、そのための二つのタイム・スケールが用意されるだろう。すなわち一つは島民のオーラル・トラディションにもとずく系譜（ジェニアロジー）で、それは首長をたどって創始祖先カイトゥにさかのぼる。これは全体として円錐形を描きながら、いくつかのクランないしトライブを構成する。そしてもう一つは、居住址、宗教的遺構および遺物などの考古学的調査による年代の測定と、その編年的研究によって導きだされるものである。歴史学的な時間の物差として、質を異にする両者の照合は、オーラル・トラディションがもつ歴史的資料としての耐久性をテストするとともに、それをもつ文化の性格を明らかにするであろう。文字をもたない民族の歴史研究に、新たな方法的期待がもてることになると思う。

（一九七三年一二月）

附記

筆者は一九七三年八月、オーストラリア国立大学（アジア文明学部および太平洋研究所）に訪問研究員として滞在中、レンネル島の予備調査をおこなった。本調査は一九七三年一二月より約二ケ月半、文部省海外学術調査助成金（「レンネル島における考古学的・民族学的学術調査」代表・江坂輝弥教授）にもとづきおこなわれる予定である。（一九七三年一二月）

註

(1) ハワイを頂点とし西南隅をニュージランド、東の隅をイースター島とする三角形地域。

(2) 一九五九年人口統計。現在約一、二〇〇人と推測される。

(3) 伊藤清司・近森　正「英領ソロモン諸島における考古学的・民族学的調査略報」一九六七年

(4) Woodford, C. M.: Notes on Rennell Island. Man VII. 1907

——Note on a Stone-headed Mace from Rennell Island. Man X. 1910.

(5) Ray, Sidney H.; Polynesian Linguistics Journal of the Polynesian Society, 26 (1917) pp. 170–79

——The Polynesian Languages in Melanesia. Anthropos XIV–XV, 1919–20

(6) Deck, Northcote.: Reunell Island. Journal of the Royal Geographical Society, 57, 1921.

(7) Hogbin, H. Ian: A Note on Rennell Island. Oceania II, 2. 1931.

(8) Stanley, G. A. V.: Report on the geological Reconnaissance of Rennell Island, British Solomon Islands Protectorate, Colonial Reports, B. S. I. P, Report for 1927. 1929.

(9) Lambert, S. M.: Health Sarvey of Rennell and Bellona Islands. Oceania II, 1931.

(10) MacGregor, G : The Gods of Rennell Island. Peabody Museum Papers XX, 1943.

(11) Firth, R.: A Native Voyage to Rennell. Oceania II, 1931.

(12) Birket-Smith, Kaj: An Ethnological Sketch of Rennell Island. Det kongelige Danske Videnskabernes, Selskab Historisk-filologiske Meddelelser, 35 nr. 3. 1956.

(13) Bradley, D.: Notes and Observations from Rennell and Bellona Islands, British Solomon Islands. Journal of the Polynesian Society, 65–4. 1956.

(14) Bradley, D. & Wolff, T.: The Birds of Rennell Island. The Natural History of Rennell Island, British Solomon Islands, 1. (ed. Wolff, T) 1958

(15) Roberts, R. G.: The Children of Kaitu. Journal of the Polynesian Society, 67, 1. 1958

(16) Elbert, S. H.: A Linguistic Assessment of the Historical Validity of Some of the Rennellese and Bellonese Oral Traditions. Polynesian culture history. Essays in Honor of Kenneth P. Emory (ed. G. A. Highland et al.) 1967

(17) Monberg, T.: An Island Changes its Religion. Polynesian culture history Essays in Honor of Kenneth P. Emory (ed. G. A. Higland et al.) 1967

(18) Elbert, S. H. & Monberg, T.: From the tow Canoes —Oral Traditions of Reunell and Bellona Islands. 1965

(19) Capell, A.: Oceanic Linguistics Today. Current Authropology. 3–4. 1962

(20) Green, R. C.: Linguistic Sub-grouping within Polynesia. Journal of the Polynesian Society. 75–1. 1966.

(21) Pawley, A.: Relationships of Polynesian Outlier

Languages. Journal of the Polynesian Society. 76. 1967
(22) Ward, R et al.: The Settlements of the polynesian 1973.
(23) Elbert, S. H.: Phonemic Expansion in Reunellese. Journal of the Polynesian Society. 71. 1962.
(24) Monberg, T.: An Island Changes its Religion, Polynesian Culture History (ed. G. A. Highland et al) 1967.
(25) Shutler, R.: Pacific Island Radiocarbon Dates-An Overview. Studies in Oceanic Culture History. Vol 2, No. 12. 1971.
(26) Ambrose, W. R. et al.: First Millenium BC Transport of Obsidian from New Britain to the Solomon Islands. Nature, Vol. 237, No. 5349. 1972.
(27) Solheim, W. G.: Further Relationships of Sa-huynh-Kalanay Pottery tradition. Asian Perspectives. 8. 1964.
(28) Poulsen, J. I.: Outlier Archaeology, Bellona, A Preliminary Report on Field Work and Radiocarbon Dates. Archaeology and Physical Authropology in Oceania. Vol 7, No. 3. 1972.